



TITLE:

イブン・コルダードベ「ユダヤ商人とロシヤ商人の旅程」 翻譯

AUTHOR(S):

藤本, 勝次

CITATION:

藤本, 勝次. イブン・コルダードベ「ユダヤ商人とロシヤ商人の旅程」
翻譯. 東洋史研究 1952, 11(5-6): 459-465

ISSUE DATE:

1952-07-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/138946>

RIGHT:

イブン・コルダードベ「ユダヤ商人と

ロシア商人の旅程」翻譯

藤 本 勝 次

—

Ibn Khordādhbeh^① は回曆三世紀（西曆九世紀）の最初の年に生れ、回曆二七二年（西曆八八五）に没したといわれているイスラム地理學者である。彼の父はイスラムに改宗したペルシヤ人で、タバリストーンの高官に任命された^②。その關係で彼は早くから官吏生活をはじめ、古代のメジヤであるア

・ジバルや後にバグダッド等の驛遞局^③の長官になつた。彼の驛遞局長官就任の年や在任期間については不明であるが、アツバス朝のカリフ、アル・ムウタミッド（西曆八七〇—

八九二）の信用と寵愛を受け、カリフ宮廷において、音楽、詩、舞踊その他遊戲、酒にいたるまで、談論の中心人物であ

つたようで、それらに關する著書^④をものしている。しかしこれらの著書はすべて無くなり、現在残つていて彼をして有名ならしめるものはとりもなおさず、Kitāb l-masālik wa l-mamālik すなわち「諸道程及州郡志」なる標題の著書である。

これはアツバス朝カリフの依頼により編修されたもので、回曆二三三年（西曆八四六）に着手され、はつきりした日付は不明であるが彼の死ぬ前まで続けられたようである。おそらく彼がバグダッドかどこかの驛遞局に勤務していた時のことと思われるが、その爲に文書局の公文書から色々の材料を集めることが出来て歴史地誌の重要な源泉となりえて後世の地理學者によつてしばしば引用されるようになった。此の

著書は最初、Barbier de Meynard によつて翻譯をつけて刊行され (Journal Asiatique 1866 V) 、その後 De Goeje が改訂して刊行した。 (Bibl. Geogr. Arab. 1889 VI)

私は De Goeje のテキストから、「ユダヤ商人とロシア商人の旅程」に關する記事を翻譯し、若干の註をつけ加えて九世紀頃の東西交通路の一面を再現しようと思うが、紙面の關係上アラビヤ語テキストをのせることの出来なかつた事をお断りする。前掲 B. G. A. の第六卷、一五三—一五五頁を参照されたい。なお、誤譯および註の不備不明なる點に關して御教示をいただければ幸甚と思ふ。

二

これ〔から述べるの〕は rāḥaniyat の Yahūd (ユダヤ) 商人の〔通商〕路〔について〕である。彼等はアラビヤ語やヘルシヤ語、また Rūmīyat (ギリシヤ語) や Aḥrānīyat (フランク人の言葉) 、Andalusīyat (スペイン語) 、ḡalabīyat (スラブ人の言葉) おも話し、陸路をあるいは海上を、東洋から西洋え、また西洋から東洋えと旅をして、西洋

からは khadām (奴隸) 、djawāra (女奴隸) 、ḡlman (若し男奴隸) 、dībādī (錦) 、dīnūd l-khazz (海狸の毛皮) 、firā (手皮) の服) 、saumūr (黒貂の毛皮) や suyt (劍) を運ぶ。

彼らはフランク王國から西の海(地中海)に船出して al-Faramā に向ふ、〔此所で上陸して〕、彼らの商品を〔駱駝の〕脊にのせて陸路二五フアルサクはなれた al-Qunūm に運んで此所から東の海(紅海)に船出し、al-Djār や Djidda に向ふ。そしてさらに進んで as-Sind, al-Hind や as-Sin (支那) にまで行く。

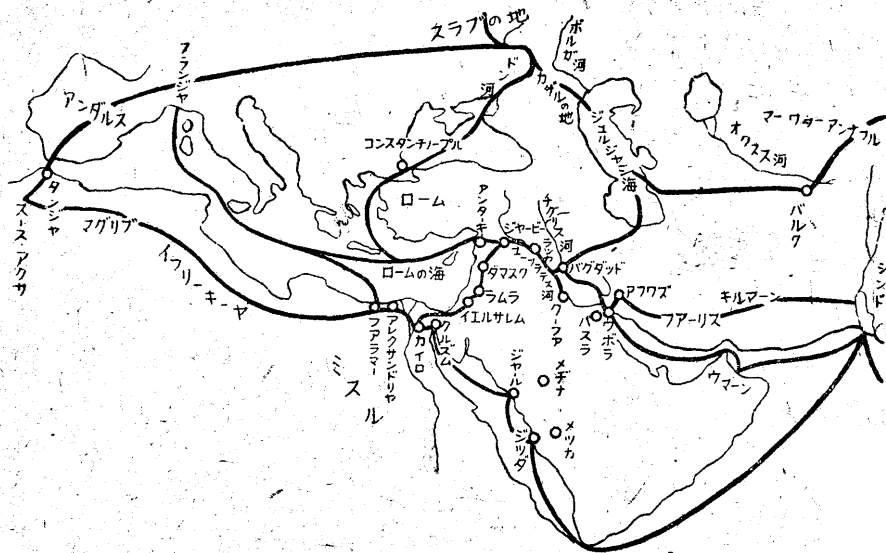
彼らが支那から〔歸える時には〕 misk (麝香) 、ūd (沈香) 、kātūr (樟腦) 、dar-sinī (肉桂) やその他これら諸地方から出る〔東洋の〕産物を運んでクルズムに歸り、フアラマーに商品を持つて行つて地中海に出るのである。

ユダヤ商人達のあるものは、しばしば Quṣṣantīniyat (コンスタンチノープル) に商品をもつて行つてビザンツの人に賣ることがあり、またあるものは、フランク王國で商品を賣りさばく。

もし彼らが欲するなら（時には）、フランクから地中海を船に商品を積んで *Antakia* ⑧ に行き、陸路三日間の旅をして *al-Djaili* ⑩ に着き、それから *al-Furat*（ユーフラテス河）を船でバグダッドに向い、ついで *Dijla*（チグリス河）を下つて *al-Uhalla* ⑪ に行つて、そこからウマーン、シンド、ヒント、支那へとつぎつぎに航海して行く。

スラブ人の一種族である *Rusyn*（ロシア）商人の通商路についていえば、彼らは海狸の毛皮や黒狐の毛皮に剣をスラブの地の最も奥からロームの海（東地中海）に運びこんで賣る。そこでビザンツの王は、その商品に十分の一税を課す。

さもなくば彼らはスラブの河 *Tonis* ⑫ を下つて *al-Khazar* ⑬ の主 *Khan* のそばを通り、此所で此の町の長に十分の一税を課けられ、つぎにさし渡し五百フアルサクもある *Djurdjan* ⑭ 海（カスピ海）に出て自分の行こうと思ふ岸に向う。またしばしば彼らのあるものは、商品を駱駝にのせて、カスピ海からバグダッドに輸送する。「此所で」スラブ人の奴隸が彼ら商人の通譯をする。そしてロシア商人が *nagata*（キリスト教徒）のまゝで「改宗せず」に許される場合は



〔ユダヤ及ロシア商人の隊商路略圖〕

al-jizyat (人頭税) を支拂わねばならぬ。

彼ら (ユダヤ商人) の陸上通商路についていえば、彼らの中でスペインから出發するもの、あるいはフランシスコ王國から出發するものは「まず」as-Sūs Laqsa^④ に行き、Tandja (タンジール) に向い、それから、Ifriqiyat, Misr (エジプト) 、Ramlā, Dinashiq (ダマスカス) 、al-Kūfa、Bagdad (バグダッド) 、Basra、al-Ahwāz, Fūris, Kirmān、シンド、ヒンド、支那え(と次々に)旅を續ける。

またしばしば彼らはスラブの村々を通つてビザンツ帝國の後側 (北方) の路を取り、カザルの主邑カムリージュに行き、カスピ海を渡つて Balkh に達し、河向うの地 (トランスオクシアナ) を越えて Tuguzgur の Warut に旅をいけ支那に達するのである。

註

① コルダードベに關しては次の文献参照。

Fruegel, of Islam 1927 II, p. 398

C. Huart: Literature Arab 1923 p. 295

Brockelmann: Geschichte der Arabischen Literature I, p.

225

Journ. Asia. 1865 V. Barbier de Meynard: p. 9
De Goeje: Bibl. Geogr. Arab. VI 序文

② ヘルシヤ人の考えが諸カリフ政府の組織に影響したことの大きなことは周知の事實で四政廳 (ディーワーン) すなわち掌璽局、文書局、稅務局、地租局の設立とその職權はサツサン朝時代のヘルシヤ行政様式から借りたとされている。アラビヤ人が行政上の重要な職に外國人をつけることは珍らしくなく、東方地域においてはヘルシヤ人後にはトルコ人において特に甚だし。

③ 驛遞制度 (Barid) カリフの專制政治を可能ならしめるに役立つたのにハリッド制度がある。これは單に公文通信の傳達のみを目的とするのではなく、官吏、軍隊の運搬や宮廷や官廳の小荷物、の移轉までも行う。ハリッドなる語はラテン語の Veridus (通信に用う駿足の馬) から借りたので、これから飛脚、驛遞の意味に使われるにいたつた。名前のみならず制度組織もローマ、ヘルシヤのそれを受繼ぎ或一定の間隔 (ヘルシヤ一〇軒、シリヤ、エジプト一〇軒) に宿驛を置き、宿驛から宿驛へと馬によつて傳達する。驛遞の監督官はその仕事の正確、迅速の責任があると同時にその地方に起つた事件をカリフに報告する一種の特殊警察の役もし、專制統治者の密偵で、時には統治者自身にも危険な存在であつた。コルダードベが政府高官と親しく後世彼がカリフの友達のみならず大臣達の一人であると云はれたのも彼の人物だけからではなかつたのであらう。

(Fruegel, of Islam I p. 658 略稱を E. I といふ。 Journ. Asia. 1865 V p. 10-13 = 略稱 J. A. といふ。)

④ 彼の著書目録は次の如し。
合奏の美。料理人の技術。勝負事と娛樂の書。酒の書。會食者と家

族の教範。ペルシヤ人と遊牧民の系圖の集録。諸道程及州郡志。天
文學の書。

⑤「エダヤ商人の旅程」は、M. Reinand: Introduction à la géographie des Orientaux p.58 に最初に譯されたが、此の文獻は見
つゝなら。

⑥此のエダヤ商人につけられた異名はサウアド（メソポタミヤの豊饒
なる地）の東部 Radan 郡にその名の起りをもちて meynard 氏
は云う (J.A. 1865 V p. 512 註2) が、Blachère 氏はペルシヤ
語の rāh-dān (道の女人) にその名の起源を求め屢々 rahdānyat
と書かれるとする。 (Extraits des Principaux Géographies
Arabes 1932 p. 28 註1)

⑦ロームは初期イスラム時代にはビザンツ帝國の人をさしギリシヤ人
のキリスト教徒を意味する。

⑧サクラブは（複數形 Sagaliba）普通中世イスラム地理學者によつ
てスラブ人をさすに用いられる語。コンスタンチノールからボルガ
河に接する地域に住み、西歷七世紀に東國境地帯に定住し、アラビ
ヤ人はビザンツとの最初の戦で彼らを知つた。 (E. I. IV p. 77,
p. 467)

⑨khadim の複數形で召使の意。此の語は男女共に用いられ、家事一
般を世話する自由民の召使にも或は奴隸の意味にも使われるが、此
所では奴隸の一般的意味につかっていると思われる。

⑩ディーバージュは雑色の絹織物でペルシヤ語の dībā dībāh のアラ
ビヤ語化されたもの。經糸も緯糸も共に絹の美しい色彩のある織物
で種類も多く着物用のものも絨氈用として用いられるものもある。
品質の良いものは染色模様共に華麗で織布も厚く高價で原産地はサ

ッサンペルシヤであるらしい。 (E. I. I. p. 987) 此所で西洋からの
輸入品として記載しているのは恐らくスペイン等の絹織物であら
う。

⑪アレクサンドリヤの西方、地中海岸のエジプトの港。西歷一〇〇
年に十字軍により破壊された。 (前掲 Blachère: p. 28 註7)

⑫イラン語（アルメニヤ語 hrasakh シリヤ語 prasakh）から借用
した語で、一時間に馬が速歩で行く距離に相當し、ペルシヤではすこ
し違ふが、アラビヤでは五七六・八米である。 (E. I. II p. 70,
Blachère: p. 23 註8)

⑬現在のメズメの近くの紅海岸にあつた海港で昔はナイル河から紅海
にひかれた運河の口にあつた。此の運河は新エジプト王國第廿六王
朝のネカウ王がはじめて大規模な計劃の下に改造し、後ペルシヤのダ
リウス一世が起工し、紀元二世紀にトラヤヌス帝が再び開鑿したも
のでイスラム時代では回歷二三年（西歷六四三）にオマルがエジプ
トとの穀物通商促進の爲に修理している。此町は他のイスラム地理
學者の記事によれば水も美しい町であるが、唯一の重要性は紅海上
の船出の出發點であることで、イドリシヤヤークートの時には沙
漠化したと云われる。 (E. I. II p. III4)

⑭アル・ジャールはメデイナの、ジッダはメッカの外港で共に紅海岸
の重要貿易港で、後者は回歷二六六年にカリフ・オスマーンによつて
メッカの外港に選ばれて以來その重要性をました。

アラビヤ地理書に見える地名には定冠詞の al の着いているのと、
無いのがあるが、これは嚴密に云えばアラビヤ語のみに冠詞をつけ
外來語には着けないのが規則である。しかしこれは全然守られてい
ない様で、例えばチグリス河はデイジュラでユーフラテス河はアル

フフラートで共に外國語である。またジッダも初期の著者によつてアル・ジッダと書かれる事のあるのを見ても明である。(Strange: Land of Eastern Caliphates p. 21. 以後 L.E.C. による)

⑮周知の如く、シンドとヒンドはもともと同一の言葉で、サンスクリット *śindhu* (河) がヘルシヤ語の影響をうけてアヴェスタでは *hunda* となつて來た。しかしイスラム初期の地理學者はこれを區別して用い、シンドはインダス河とミフラーンに接する國々に限りヒンドは回教徒征服地以外の印度をさして、後にヒンドの名が全印度を含む様になつた (E.I. II p. 312, L.E.C. p. 331)

⑯ギリシヤ人の所謂アンチオキヤで北シリヤの都市。前三〇〇年にアレクサンダー大王没後のシリヤ王國のセレコス一世によつて昔のギリシヤ植民地に創設された。商業の中心地としてシリヤの首府となり、ローマとアレクサンドリヤに次ぐ全ローマ帝國内の最も重要な都市として繁榮した。しかしサツサン朝ベルシヤが興るに及び、東ローマの東方勢力を弱める爲に攻撃され、コスロー一世によつて五三八年に破壊された。後ユスチニアヌス帝により再建されたが、六三八年にアラビヤ人により占領され對ビザンツの國境防衛都市となつた。現在では通商も衰退し市場も重要でなくなつたが、當時はユーフラテス河から地中海に出るにも、シリヤから小アジアに行くにも兩通商路の交叉點で重要な商業都市でもあつた。アンターキーは普通名詞で「絨氈」を意味し織物工業の中心地としての昔の地位を示めしつゝ (E.I. I p. 359-360)

⑰ De Goeje はユーフラテス河岸の Balis の附近の地名としてゐる (B.G.A. IV p. 115 註 1)。バーリスはラツカの西にあり此所からユーフラテス河は北上してゐる。此所はシリヤへ行く河港で、多くの

隊商路の中心點で、西歷十世紀頃にはなお人口稠密な都市であるとムカダツシーは記している。(L.E.C. p. 107)

⑱ ウボラはギリシヤ人にアポロニスとして知られたチグリス河口のヘルシヤ灣頭東洋貿易港である。西歷一世紀頃から既に東洋貿易港として知られていたが六・七世紀の間に一層繁昌した。アラビヤ人が此地を占領してから回歷一七年(六三八)にカリフ・オマルはウボラの卑濕をさけてやゝ内地にバスラ市を建設し、八九世紀にかけて繁榮したのでウボラはやゝ東洋貿易港としての重要性を失つたがなお相當繁昌していた。(桑原隲藏著波斯灣の東洋貿易港について東西交通史論叢頁三六〇—L.E.C. p. 44-47)

⑲ De Goeje はドン河にあつてゐる。

「スラブの河」という語は後世の地理書にはなくなり「ルースの河」と變形しているが、このことはコルダードべにあらわれた記事がロシアにおけるノルマン勢力の強固になる以前の狀態を反映してゐると考えられてゐる。(E.I. III p. 1181)

⑳ 西歷六世紀頃東ヨーロッパの草原はトルコ民族の王國に屬してゐたが、その支配から脱してカザール人が遊牧王國を造つたといわれる。その首府は、はじめボルガ河畔にはなかつたやうで、六二七年に對ベルシヤ戰におけるビザンツ帝國の強力な同盟者であつた。七二〇年にアラビヤ人と戰つて敗れ、その住居をコーカサスの北斜面からボルガの下流に居を移したといわれる。(E.I. I p. 786)

㉑ B de Meynard のテキストによれば (J.A. p. 116 12行目) の箇所は「スラブの河を船で下つてカザールの町を通る支流を横ぎり……」となつており、スラブの河と解釋してゐる。つまり船 (sufun) を Denis に「支流 (khalid) を khamidj と訂正されてゐること

なるが、どちらが正しいのか寫本が見れないので判断し得ない。

②② カスピ海はタバリスターン海、ジュルジアーン海、バークー海等と種々の呼び名があるが、これはアラビヤ人が湖や海を呼ぶのにその岸にある地方や都市の名で呼ぶからで、カスピ海は後にカザル海と味はれるのは中世初期にその北方にあつたカザール王國からその名を取つたのである。(L.E.C. p. 232-233, p. 458)

②③ 此所の「彼ら」という人稱代名詞は、ロシア商人をさすものとして取れ、イスラム百科事典Ⅲ頁一一八一、ルースの項にもコルダードへの「ロシア商人の路」として此所の記事が出ている。しかし De Goeje は「ユダヤ商人」と解釋し、内容からみてもその方が穩當であるので彼の說に従つておいた。

②④ 「あちらのスース」の意味。現在が南部モロッコ地方で西に太平洋に續く地方である。イスラム地理學者の記事によれば穀物果物共に豊富にして特に甘庶で有名である。回歷一一七(七三五)年にハビブ・ブン・ナビー・ウバイドにより征服されイスラムに改宗した。スース地方はタンジールを首府とする北部モロッコのスース・アドナ(こちらのスース)との二つに區別されてゐる。(E.I. IV p. 568)

②⑤ ラテン語のアフリカから轉訛。アラビヤ人によつて現在の北アフリカの東部をさし、西はマグリブと呼ばれる。

②⑥ バレスチナの一都市。エルサレムの東北東にある。ウマイヤ朝のカリフは好んでバレスチナの諸都市に住んだが、ワリドの時彼の弟でバレスチナの知事であつたスレイマンがラムラの新都市を回歷一八年に建設し、州政府を此所に移した。巨大な貯水池の造築は有名である。(E.I. III p. 1115-1117)

②⑦ アフワーズはクジスターンの首府。輸出港であるバストラの商品集積地で多くの大倉庫があり各地からの商品をバストラに運ぶ前に此所で貯藏した。此の地方の砂糖は十世紀頃のベルシャ、メソポタミヤ全地域に輸出され、ディーバージュの製造も有名であつた。(L.E.C. p. 233-234, p. 246)

②⑧ アラビヤ人は一地方の首府は特別にそれ自身の名前があつても、その地方の名前によつて呼ぶのが普通で、ダマスクは今なお、アツ、シャーム(シリアの首府)と呼ばれる。そこでキルマーンといえは首府のシールジャーンをさすが後世ではシールジャーンが崩壞してから設けられた現在のキルマーン市をさす。

②⑨ 此の河はオクス河をさし、イスラム地理學者は此の河をベルシャ人とトルコ人との境界線と考えた。

③⑩ *Tuğuzğur* は初めラシード・ウツデーンに見える *Tokuz-Uğur* よりウイグル人と考えられたが、後にオルコン碑文等に見える *Tokuz-Oğuz* (*ğuz*) から最近數人の學者により *Tuğuzğuz* と讀むべきでありウイグル人のみをさすのではなくトルコ系の人をさすと解されてゐる。(E.I. IV p. 805-806)

**THE TRADE ROUTES OF JEWISH AND
RUSSIAN MERCHANTS**

By Katsuji Fujimoto

**A Japanese translation from the Arabic of Ibn Khordadbeh's
KITAB L-MASALIK WAL-MAMALIK.**